

【全身状態】 【病態の位置】 【病態の情勢】 【病態の性質】

《八綱》

陽

裏

実 > 虚

熱

《病因病邪》

気滞・瘀血・内熱
湿

《気血津液》

血熱 やや血虚


《臟腑》

肝・女子包

弁証論治

【弁証】肝火上炎、血熱、内湿

【病機】素体：内湿

- 肝氣鬱結⇒肝火上炎⇒血熱
⇒瘀血
- 

【治法】疏肝清熱、涼血、化瘀

【処方】竜胆瀉肝湯加減

竜胆草6g 山梔子6g 黄芩8g 柴胡6g 地黄8g
当帰5g 木通6g 車前子5g 沢瀉6g 牡丹皮8g
桃仁6g 甘草4g

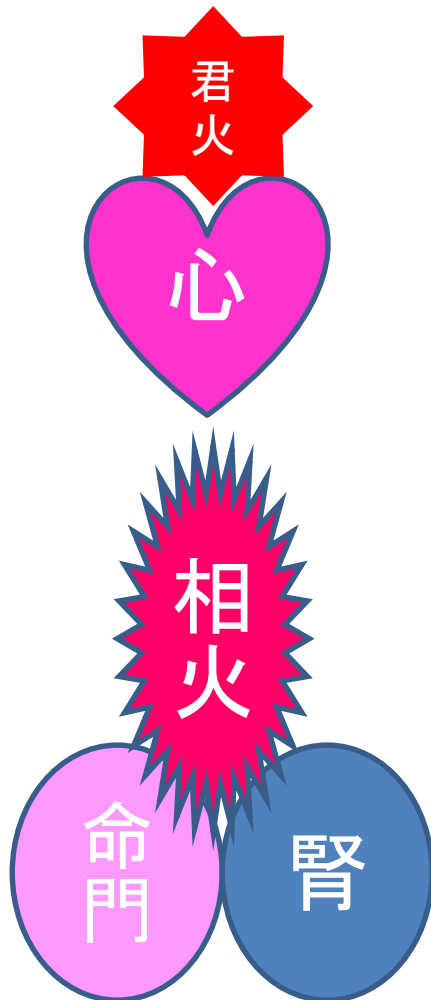
加味逍遥散の歴史

- 逍遥散は和剤局方(北宋)に初めて出てくる。
- 元・明・清代に非常に多様された処方
- 肝気鬱結に使用する処方の基本の形

疏肝薬+補血薬+脾胃の薬

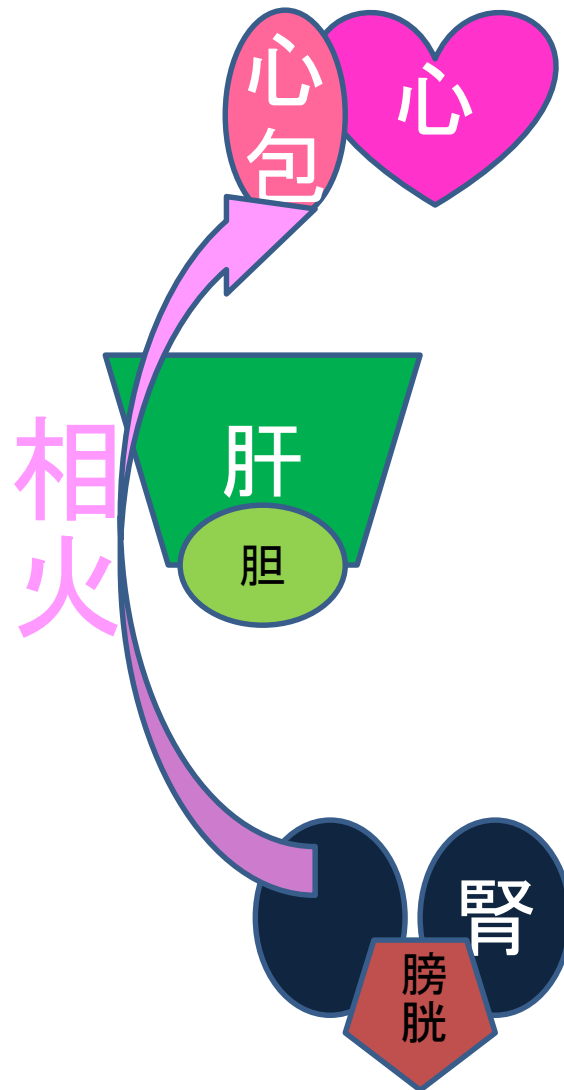
四逆散:補血薬が芍薬だけ、胃に働く甘草と枳実であり、複雑化した病態には向かない。

“相火論”



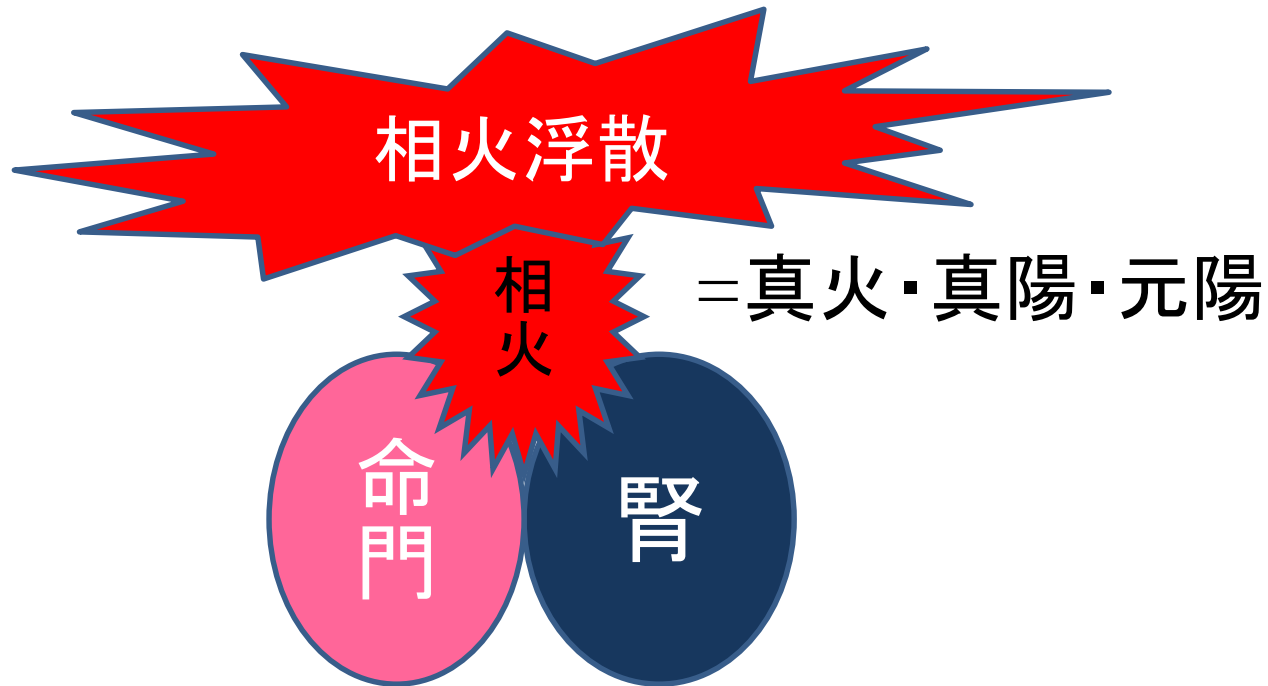
- 心に宿り主に意識の清明さなどにかかわり、全身を統括する「君火」
- 腎・命門に宿り「君火」の命令のもと、実際に身体活動を支える「相火」。
- 相火は暴走し、邪的な性質を帯びることもある。
- 南宋代より医学に導入され、議論の中心を担うこととなる。

相火論の流路



“命門相火説”

南宋代よりみられ明代薛己・趙献可により確立される。



相火を“難経”で根本的生命力が宿る“命門の火”として規定

→相火は“瀉す”対象ではなく、相火の暴走の原因である腎(命門)の陰を補うことで抑制する。Cf. 滋陰降火法

→相火を補う概念が生まれる

→相火が衰えることでかえって相火が浮散する病態が認識された